

実習後の学生の自己課題の動向

—過去5年の幼稚園教育実習事後指導を通して—

高月 教恵*・新藤 慶・片山 啓子・安達 雅彦
三好 年江・堀内 秀子・逸見 晶子・横見 みや子

幼児教育学

(2007年11月7日受理)

本稿は、A大学の学生たちがまとめた教育実習後の自己課題の動向を、過去5年にわたって分析したものである。その結果、以下の諸点が明らかとなった。第1に、「気になる子ども」「設定保育」「けんか」「自由保育」など具体的な場面と結びつけて自己課題を捉えているが、基本的には子ども理解や活動内容に困難を抱えていること。ただし第2に、そうした困難を先輩教師の協力をえながら、なんとか解決しようとする発想は薄く、問題解決のための努力をしようとするところまでに至っていないこと。また第3に、子どもの安全など、保育者にとっては重要だが、学生たちが気づいていない課題が存在していること、である。そこで、今後は、子どもと関わる活動や具体的な事例に基づくケーススタディを拡充していくとともに、実習現場からの評価の分析を進め、学生の抱える課題を多角的に把握したうえで、それに基づいた事後指導を展開することが必要となる。

はじめに

A大学では、2年間で、保育士登録資格および幼稚園教諭二種免許状を取得することができる。そして、各々の資格を取得するためには、次のような計画で実習が実施されている(表1参照)。1年次10月に保育所実習10日間、2年次6月に施設実習10日間、2年次7月に保育所実習か施設実習のいずれかを選択して10日間の実習が実施されている。保育実習の前後には、45時間の保育実習に関する事前及び事後指導が実施される。そして、2年次の9月末から10月にかけて、20日間の教育実習(幼稚園)が実施される。つまり、教育実習がA大学における最後の実習ということになる。

教育実習の前後には、31時間の教育実習(幼稚園)に関する事前指導、14時間の事後指導が実施される。教育実習事前指導では、実習先の選定・先輩の事後指導授業への参加・実習を受けるにあたっての準備が主であるが、事後指導においては、実習経験後「特に心に残ったことについて」の全体討議→グループ討議→自己課題レポート作成→グループ討議→グループごとの全体発表と全体討議を中心に、授業が展開されている。この事後指導における学生の自己課題の動向を把握することは、実習指導においても、実習先(現場)との連携においても、重

要なことと思われる。そして、そのことが今後の学生の
実習の充実に繋がると考えられる。

本研究では、過去5年間の教育実習事後指導における
個々の学生のレポートに基づいて、学生の自己課題の動
向について考察する。

1. 研究の目的と方法

本研究の目的は、幼稚園教育実習事後指導の学生のレ
ポートを読み取ることによって、学生の自己課題につい
て考察することである。

調査方法は、学生の実習事後指導のレポートを分析す
る。

対象は、平成14年度A大学2年次生58名、平成15年度A
大学2年次生56名、平成16年度A大学2年次生51名、平成
17年度A大学2年次生51名、平成18年度A大学2年次生51
名である。

2. 倫理的配慮

分析にあたっては、学生や実習園そのもの、および実
習園の教諭や児童などの特定につながらないように配慮し
た。

*連絡先：高月教恵 幼児教育学科 新見公立短期大学 718-8585 新見市西方1263-2

表1 実習計画

実習種別	実習施設		実習段階	実習時期	おおむねの実習日数
保育実習Ⅰ (必修科目)	保育所		見学・参加実習	1年次・10月	10日
	児童福祉施設		見学・参加実習	2年次・6月	10日
保育実習Ⅱ (選択必修科目)	保育所		総合実習	2年次・7月	10日
保育実習Ⅲ (選択必修科目)	児童福祉施設		総合実習	2年次・7月	10日
教育実習	管内	管外	総合実習	2年次・9月～10月	20日

注) その他、保育所見学(1年次9月)、福祉施設見学・小学校見学(1年次11月)、福祉施設見学実習(2年次・5月)、幼稚園見学実習(2年次6月)。幼稚園教育実習は管内で実習をすることが原則であるが、出身園もしくは就職に有利と判断された場合には、地元での実習をすることも可能である。

表2 年度別にみたテーマの変遷(人、%)

年 度	14	15	16	17	18	合 計
気になる子ども	19(32.8)	28(50.0)	23(45.1)	9(17.6)	21(41.2)	100(37.5)
子ども理解	3(5.2)					3(1.1)
言葉がけ	10(17.2)	3(5.4)			1(2.0)	14(5.2)
子ども理解(言葉がけ)	6(10.3)	1(1.8)		1(2.0)	10(19.6)	18(6.7)
子どもへの対応(教師と子どもの信頼関係)		1(1.8)				1(0.4)
子どもへの対応(物の貸借)			1(2.0)			1(0.4)
子どもへの対応(人間関係)		1(1.8)	2(3.9)	2(3.9)		5(1.9)
遊びの選び方	1(1.7)					1(0.4)
けんか	9(15.5)	7(12.5)	6(11.8)	6(11.8)	5(9.8)	33(12.4)
指導案と指導方法			1(2.0)	3(5.9)		4(1.5)
自由保育	1(1.7)	3(5.4)	4(7.8)	7(13.7)	2(3.9)	17(6.4)
設定保育	5(8.6)	8(14.3)	5(9.8)	14(27.5)	2(3.9)	34(12.7)
縦割保育・異年齢交流	3(5.2)	3(5.4)	2(3.9)	3(5.9)	3(5.9)	14(5.2)
統合保育	1(1.7)		6(11.8)	4(7.8)	3(5.9)	14(5.2)
グループ活動				1(2.0)		1(0.4)
教師の資質		1(1.8)	1(2.0)			2(0.7)
教師間の連携				1(2.0)		1(0.4)
園外保育					1(2.0)	1(0.4)
安全管理					3(5.9)	3(5.9)
合計	58(100.0)	56(100.0)	51(100.0)	51(100.0)	51(100.0)	267(100.0)

注) 空欄は、該当データなし。

3. 結果と考察

(1) 過去5年間の自己課題のテーマ (表2参照)

過去5年間に、学生から出された自己課題のテーマは、気になる子ども、子ども理解、言葉がけ、子ども理解・言葉がけ、子どもへの対応 (教師と子どもの信頼関係)、子どもへの対応 (物の貸借)、子どもへの対応 (人間関係)、けんか、自由保育、設定保育、縦割保育・異年齢交流、統合保育、グループ活動、教師の資質、教師間の連携、園外保育、安全管理であった (図1参照)。その中でも、選択比率の高かったテーマは、気になる子ども37.5%、設定保育12.7%、けんか12.4%、子ども理解・言葉がけ6.7%、自由保育6.4%であり、気になる子どもを自己課題のテーマにしている学生が多いことがうかがわれる。

(2) 過去5年間の年度別にみたテーマの変遷

①年度別にみた自己課題のテーマ (表2参照)

平成14年度では、気になる子ども、言葉がけ、遊びの遊び方、けんか、自由保育、設定保育、縦割保育・異年齢交流、統合保育、であった。平成15年度では、気になる子ども、言葉がけ、子ども理解・言葉がけ、子どもへの対応 (教師と子どもの信頼関係)、子どもへの対応 (人間関係)、けんか、自由保育、設定保育、縦割保育・異年齢交流、教師の資質、であった。平成16年度では、気になる子ども、子どもへの対応 (物の貸借)、子どもへの対応 (人間関係)、けんか、指導案と指導方法、自由保育、設定保育、縦割保育・異年齢交流、統合保育、教師の資質、であった。平成17年度では、気になる子ども、子ども理解・言葉がけ、子どもへの対応 (人間関係)、けんか、指導案と指導方法、自由保育、設定保育、縦割保育・異年齢交流、統合保育、グループ活動、教師の連携、であった。平成18年度では、気になる子ども、言葉がけ、子

表3 年度別にみた選択比率の上位5テーマの変遷

年 度	14	15	16	17	18	全体
1位	気になる子ども (19人、32.8%)	気になる子ども (28人、50.0%)	気になる子ども (23人、45.1%)	設定保育 (14人、27.5%)	気になる子ども (21人、41.2%)	気になる子ども (100人、37.5%)
2位	言葉がけ (10人、17.2%)	設定保育 (8人、14.3%)	[2位] けんか、 統合保育 (各6人、11.8%)	気になる子ども (9人、17.6%)	子ども理解 (言葉がけ) (10人、19.6%)	設定保育 (34人、12.7%)
3位	けんか (9人、15.5%)	けんか (7人、12.5%)		自由保育 (7人、13.7%)	けんか (5人、9.8%)	けんか (33人、12.4%)
4位	子ども理解 (言葉がけ) (6人、10.3%)	[4位] 言葉がけ、 自由保育、 縦割保育・ 異年齢交流 (各3人、5.4%)	設定保育 (5人、9.8%)	けんか (6人、11.8%)	[4位] 縦割保育・ 異年齢交流、 統合保育、 安全管理 (各3人、5.9%)	子ども理解 (言葉がけ) (18人、6.7%)
5位	設定保育 (5人、8.6%)		自由保育 (4人、7.8%)	統合保育 (4人、7.8%)		自由保育 (17人、6.4%)
5テーマの 合計人数 ・比率	49人 84.5%	49人 87.5% ¹⁾	44人 86.3%	40人 78.4%	42人 82.4% ¹⁾	202人 75.7%
N	58人	56人	51人	51人	51人	267人

注) 1. 4位に3項目あるので合計6項目をあげているが、ここでは上位5項目の割合を見るため、4位の項目から2項目分だけを組み入れて集計した。

ども理解・言葉がけ、けんか、自由保育、設定保育、縦割保育・異年齢交流、統合保育、園外保育、安全管理、であった。

②年度別にみた選択比率の上位5テーマの変遷(表3・図1参照)

平成14年度では、気になる子ども32.8%、言葉がけ17.2%、けんか15.5%、子ども理解・言葉がけ10.3%、設定保育8.6%であった(図2参照)。平成15年度では、気になる子ども50.0%、設定保育14.3%、けんか12.5%、言葉がけ、自由保育、縦割保育・異年齢交流5.4%、であった(図3参照)。平成16年度では、気になる子ども45.1%、けんか、統合保育11.8%、設定保育9.8%、自由保育7.8%、であった(図4参照)。平成17年度では、設定保育27.5%、気になる子ども17.6%、自由保育13.7%、けんか11.8%、

統合保育7.8%、であった(図5参照)。平成18年度では、気になる子ども41.2%、子ども理解・言葉がけ19.6%、けんか9.8%、縦割保育、異年齢交流、統合保育、安全管理5.9%、であった(図6参照)。

平成14年度、平成15年度、平成16年度、平成18年度は、いずれも気になる子どもの比率が高いが、平成17年度は、設定保育の比率が気になる子ども比率を上回っていることがわかる(図1参照)。設定保育を課題とした学生の実習先について、年度ごとにみると、平成14年度では管内20.0%・管外80.0%、平成15年度では管内37.5%・管外62.5%、平成16年度では管内20.0%・管外80.0%、平成17年度では管内57.2%・管外42.8%、管内50.0%・管外50.0%であった(表4参照)。管内については実習先が毎年変わらないことから考えると、平成17年度に設定保育を自己

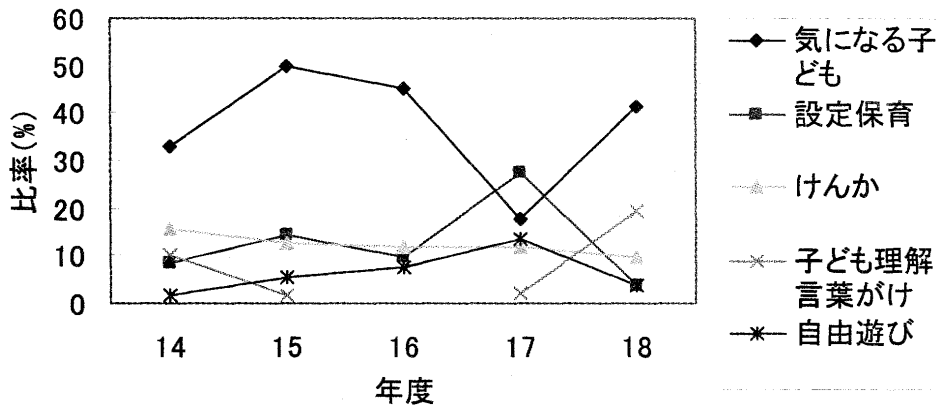


図1 全体上位5項目の選択比率の変遷

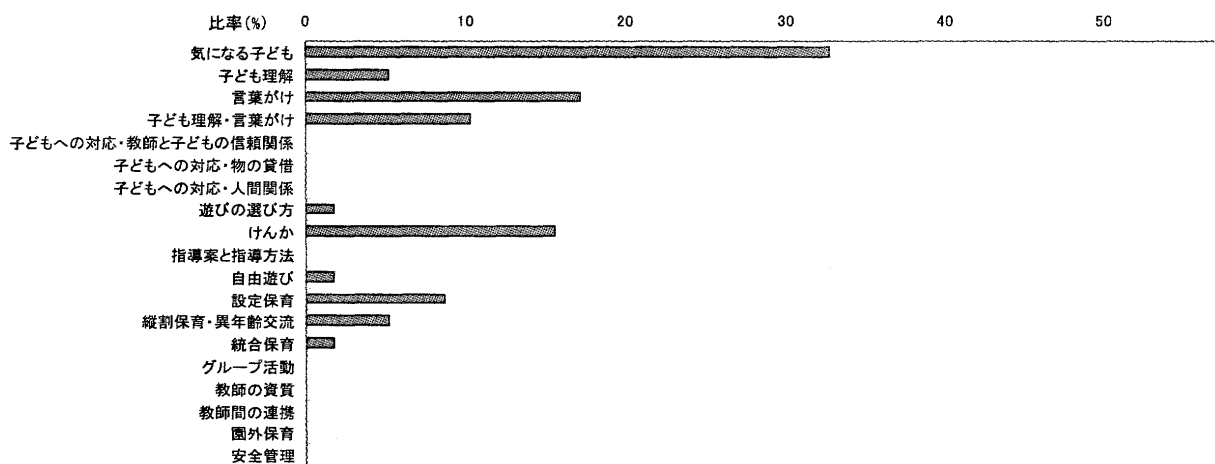


図2 平成14年度の各項目の選択比率

実習後の学生の自己課題の動向

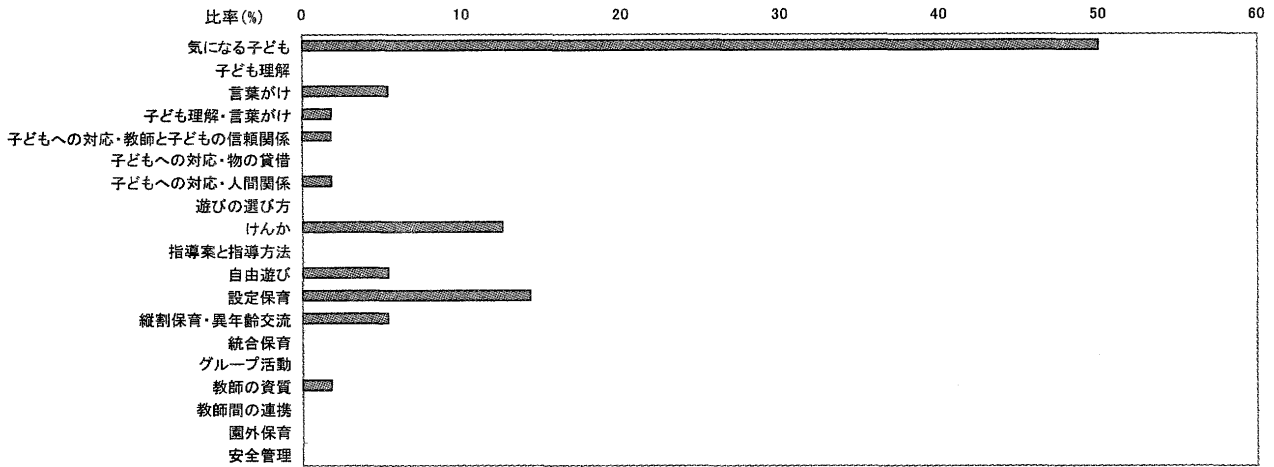


図3 平成15年度の各項目の選択比率

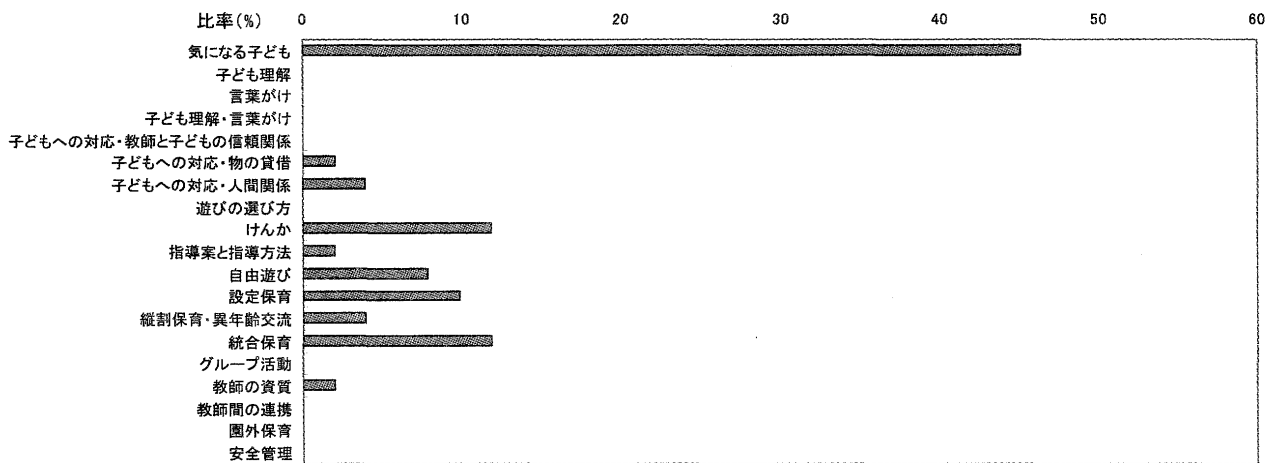


図4 平成16年度の各項目の選択比率

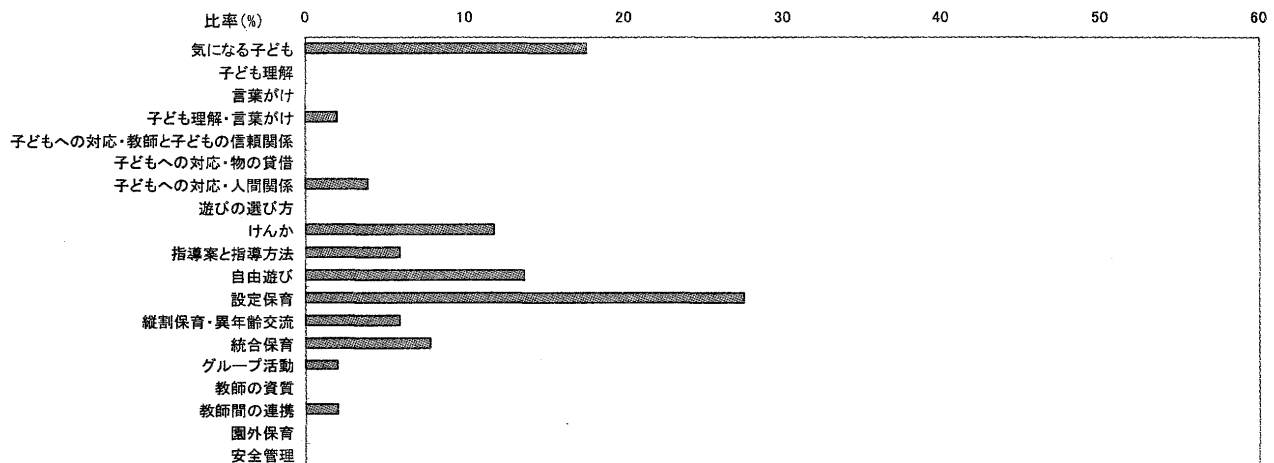


図5 平成17年度の各項目の選択比率

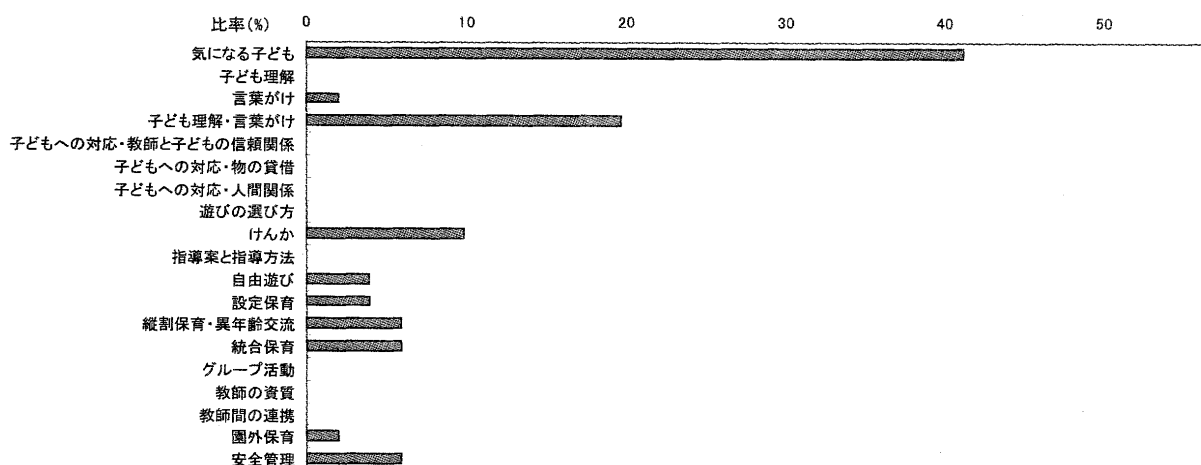


図6 平成18年度の各項目の選択比率

表4 設定保育を自己課題とした学生の実習先（管内・管外）の割合

年度	管内	管外
平成14年度	1人、20.0%	4人、80.0%
平成15年度	3人、37.5%	5人、62.5%
平成16年度	1人、20.0%	4人、80.0%
平成17年度	8人、57.2%	6人、42.8%
平成18年度	1人、50.0%	1人、50.0%

課題とした学生の原因は、実習先によるものではないといえよう。

(3) 選択比率の上位5テーマと主な内容

①気になる子ども

平成14年度の自己課題の具体的内容は、子どもの状態、教師のかかわり方、家庭連携であり、平成15年度は、子どもの状態、子ども理解、言葉がけ、教師のかかわり方、家庭連携であり、平成16年度は、子どもの状態、教師のかかわり方、子ども理解、家庭連携であり、平成17年度は、子どもの状態、教師のかかわり方であり、平成18年度は、子どもの状態、子ども理解、言葉がけであった。

②設定保育

平成14年度の自己課題の具体的内容は、導入のしかた、子どもの興味を見取っての活動の展開、片付けの援助、一人一人の把握であり、平成15年度は、活動内容の選択、導入のしかた、全体と個の把握の難しさ、子どもとの信頼関係、教師も一緒に楽しく遊ぶことの大切さであり、平成16年度は、活動内容の選択、ねらいをとらえての援助のあり方、個の把握、言葉がけであり、平成17年度は、活動内容の選択、導入のしかた、展開のしかた、全体と

個の把握、子ども理解、参加しない子どもへの対応、言葉がけ、自由保育への切り替えの工夫であり、平成18年度は子ども理解、活動内容の選択、援助のしかたであった。

③けんか

平成14年度の自己課題の具体的内容は、子ども理解、教師の援助のしかた、子どもとの信頼関係であり、平成15年度は、子ども理解、教師の援助のしかた、言葉がけであり、平成16年度は、子ども理解、教師の援助のしかた、言葉がけであり、平成17年度は、子ども理解、教師の援助のしかた、言葉がけであり、平成18年度は、子ども理解、教師の援助、言葉がけであった。

④子ども理解・言葉がけ

平成14年度・平成15年度・平成17年度・平成18年度ともに子どもを理解しての言葉がけについてであった。

⑤自由保育

平成14年度の自己課題の具体的内容は、環境構成、教師の援助であり、平成15年度は、主体的な活動の選択、環境構成、教師の援助であり、平成16年度は、教師の援助であり、平成17年度は、教師の援助、環境構成、活動

内容の選択であり、平成18年度は、環境構成、教師の援助であった。

おわりに

以上、平成14年度から平成18年度までの教育実習事後指導における自己課題の内容を概観した。ここから明らかになったこととして、以下の3点を指摘できよう。

第1に、多くの学生は、子ども理解と活動内容に課題を抱えているということである。学生たちは、「気になる子ども」「設定保育」「けんか」「自由保育」など具体的な場面と結びつけて自己課題を捉えているが、その本質を探ると、大半が子ども理解と活動内容に行き着く。つまり、目の前にいる子どもそのものや子どもの状態をうまく理解することができないので、子どもにどのようにかかわればよいのかがわからず、また適切な内容をもった保育活動ができずにとまどっている、という学生の姿が浮かび上がってくる。

第2に、そのようにとまどいながら、そのとまどいを解決するために、実習先の先輩教師に相談したり質問したりしている姿は見て取れるが、先輩教師と連携をとりながらなんとか解決しようと努力するところまで至っていない様子が見られる。保育活動に困難を抱えているのであれば、先輩教師たちに協力を求め、困難を解消していくことがよりよい保育を実践するためには大きな意味を持つと考えられる。しかし、「教師間の連携」を自己課題として挙げた者は、この5年間で1人(0.7%)のみである。このことは、学生たちが戸惑いを抱えつつ、それを一人だけで解決しようと試み、結局解決できない様子が見られる。また、現場からは、学生たちに「もう少し積極的になってほしい」という評価を受けることがよくあるが、その背景には、こういった先輩教師に「わからないことを質問して、先輩教師のアドバイスを参考にして、実習中に具体的に実践してみる」という姿勢の弱さが関連していると思われる。

また第3に、子どもたちの安全に対する配慮も希薄である。あってはならないことだが、保育現場での事故により、子どもが犠牲になることはありうる。そのため、保育者には、子どもの安全を守るという自覚と能力が求められる。にもかかわらず、「安全管理」を自己課題として挙げた者は、この5年間で3人(1.1%)にすぎない。このように、重要な課題があるにもかかわらず、その課題が学生たちに見えていないという状況も看過できない。

これらの知見をふまえると、何よりもまず、学生たちに子どもの実際を理解する機会を、今まで以上に確保することが必要となる。そのためには、実習だけでなく、ボランティア活動などを通じて、実際の子どものと触れあう経験を積むことが重要である。また、講義でも、保育

場面の具体的な問題事例を取り上げて、その対処法を討議するといったケーススタディなどを積極的に取り入れていくことで、子ども理解と適切な活動のあり方を学ぶことも求められる。

その一方で、学生たちに見えていない課題の存在に気づかせることも欠かせない。そのためには、事後指導のなかで、現場からの実習の評価を、可能な範囲で学生たちに伝えることにより、課題の存在に気づかせ、それに対する適切な対応方法を学ばせていくことが必要となる。

これらの取り組みを行っていくために、今後は、今回のような学生の自己課題の分析を継続するとともに、実習現場からの評価の分析を進めることで、学生の課題を多角的に捉え、それを事後指導に生かすという流れを構築していきたい。

参考文献

- 1) 塩見優子, 秋川陽一, 石橋由美, 伊藤國彦, 梅澤啓一, 衛藤吉則, 木戸由子, 佐藤蕙子, 高月教恵, 立石あつ子, 中原朋生: 保育学生の学習・生活態度と意識に関する研究, 保育士養成研究, 18, 1-17, 2001
- 2) 野口隆子: 実習指導における役割観に関する研究—保育者・実習生比較による分析—, 日本保育学会第59回大会発表論文集, 339, 2006
- 3) 岩濱理江子: 自らの気づきから学ぶ教育実習生を育てるメンタリングのあり方, 日本保育学会第59回大会発表論文集, 340, 2006

高月 教恵・新藤 慶・片山 啓子・安達 雅彦・三好 年江・堀内 秀子・逸見 晶子・横見 みや子

Trend of Students' self-problems after their Practices
- Through Guidance after the Kindergarten Education Practice of Five Years in the Past -

Norie TAKATSUKI, Kei SHINDO, Keiko KATAYAMA, Masahiko ADACHI

Toshie MIYOSHI, Hideko HORIUCHI, Akiko HENMI, Miyako YOKOMI

Department of Early Childhood Education, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan